
~ Kokoro ~ ココロ

榎吾春樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼Kokoro＼ ココロ

【Nコード】

N2900V

【作者名】

檉吾春樹

【あらすじ】

これは、私の身に起こった事を基にしています。
私が思ったこと、感じたこと。そして、行動したこと。様々な事を織り込んで書いています。

<http://ameblo.jp/harukiseri/>
から重複投稿です。

ブローグ

私は何処で道を間違えてしまったのだろう。もう分からなくなっ
てしまった。

あれは、もう遠い昔のことだった。あの私の笑顔は、もう二度と
戻ってこない。

親はよく、私に謝ることがある。だけど、謝るぐらいなら時間を
返して欲しい。笑って過ごしていたかった、私の時間を。それが出
来ないから、謝るしかないんですよ。そうでしょ。

本当は、気づいてる。私自身が、時間の鎖に囚われていること。
ずっと、過去ばかり気にしていること。

たった一言でいいから、言って欲しかった。

- 頑張り過ぎないで -

登場人物

・ 檜 吾 カシワレ 玻璃希 ハルキ

通称 ハルキ

・ 織芽 シキメ 和華羽 ワカバ

通称 ワカバ

・ 屯釜 ムラカマ 亜都野 アツヤ

通称 ムツちゃん

・ 浦宮伽 ホミヤガ 槻 タラツキ

通称 ホミヤガ

・ 天未内 アメミウチ 琥者 クジャ

通称 アメアメ

・ 麻更伊 マサライ 日芦 ニチロ

通称 マサさん

・ 春寺 ハルジ 玲夢 レイム

通称 レイちゃん

・ 麻更伊 マサライ 摺 ツカム

通称 マサ君

・ 間雁 マカリ 時政 トキマサ

通称 マカリ

・ 狽^{ヒシケ}俟^{ヒシケ}希^{ヒシケ}
通称 ヒシ
廻^{ノジリユオ}茲^{ノジリユオ}龍^{ノジリユオ}和^{ノジリユオ}

小学時代

あるところに、小さな女の子がいました。その女の子の名は、ハルキ。彼女はもうすぐ、弟が出来るのだ。けれど彼女はまだ、この先に起こることには全然気づいていなかった。

それから少し経って彼女は小学生になった。変化があったとすれば、弟が生まれたことだった。彼女は、今までよりも頑張っていた。姉として、小学生として。

ある日彼女は、雨の日に傘を振り回して遊んでいた。その時、近くにいた彼女の友達に当たってしまった。とても申し訳ないと、彼女は思った。きっと許してもらえないとも思った。

次の日、ハルキは友達の家に行った。親と一緒に見舞いをしに。友達は許してくれたが、ハルキの中は罪悪感でいっぱいだった。

時が経ってハルキの家族は引越しをしなければ、ならなくなった。小学校に入って、半年のことだった。

彼女の中には不安があった。新しい学校でみんなと仲良くできるか、外国人だけど他に人と変わりなく接してもらえるか、とか色々考えてしまう。

それからしばらくして、彼女は新しい学校に通学しはじめた。まだ分からないことがたくさんあって、初めのうちは慣れないことばかりだった。クラスや授業も全然違っていた。

彼女には新しい友達ができていた。ハルキの友達の名は織芽和華^{シキメウ}羽^{カバ}という子だった。彼女とハルキはとても仲が良かった。ハルキも他の子たちよりもずっと良いと思っていた。何故なら、外国人のハルキのことを他の子たちと変わらず接してくれるからだ。もしかしたら、他の子よりもよく接してくれるのだろう。だけど他の子は、ハルキのことをよく思っていないみたいだ。その結果、この小学校で後に苦しむこととなる。

二年のときが流れて、ハルキはすっかり学校にも慣れた。今のク

ラスはどちらかといえば、嫌いだ。クラスに入りたくないと考えてしまうのだ。何故なら、「いじめ」があるからだ。でも、頑張っ通っている。ワカバがいるからだ。彼女は、いつもハルキを支えてくれる。

だけど、彼女もハルキと同じようにいじめを受けていた。彼女も彼女で苦しんでいたということを、ワカバが話してくれた。

ハルキは必死になっていじめに耐えていた。そんな時、一年の中で一番嬉しい日がやってきた。

そう、誕生日だった。

この日だけはクラスのみんなも違っていた。誕生日と知っている人は、「おめでとう」って言うてくれた。その日だけは、とても楽しく思えた。

さらに時は流れ、ハルキは小学校の卒業式を行っていた。ハルキは、春から中学生になる。小学校で過ごした6年間は楽しくも、苦しいこともあった。けどワカバがいたから、ここまで来れたと思う。でも何故か、涙は流れなかった。きつとみんな、別れても会えると思っていたのだろう。しかしこの考えを覆す出来事が起きるとは、当時のハルキは知るはずもなかった。

中学時代

中学校にハルキは入学した。新しい友達や、ワカバがいて、楽しいと思っていた。

部活はバスケット部にしようと思っていた。けどそんな中、父の祖母が、父の誕生日の日に息を引き取った。とても悲しい知らせだった。季節は夏が過ぎて、秋になった。私は美術部に転部していた。やっぱり諦めてしまった。そして、冬にはブラジルに帰国することになっている。

この部活にはいってまだ少ししか経っていないけど、4ヶ月もいなくなるのは淋しく思った。ワカバと別れて4ヶ月も連絡できないことになるのは辛いけど、またきつと会えると信じて、ブラジルに行く準備をしていた。

ハルキは他にも、辛いことがあった。それは、クラスのこと。

クラスでは陰口を言われていて、すごく嫌だった。不登校まがいなことも何回もあった。彼女は小学校でのことを思い出していて、辛くなっていた。

その反動が分からないが、部活では攻撃的になってしまっていた。その為、いつもホミヤガに当たってしまっていた。

自分が悪いのは分かっていた。自分をコントロールできない自分が弱いと、ハルキは知っていた。だけど、どうしていいのか分からなかった。

ついに、ブラジルに帰国する日が来てしまった。淋しいとは思えうけれど、涙はやっぱり流れなかった。

心のどこかで、平気だと、大丈夫だと考えていたのだろう。それとも、親を信じられていなかったのだろうか。

どちらにしろ、ハルキの心は黒いものがたくさんあって、もう信じられるような感じではなかった。何故なら、もう自分が誰だか分からなくなってしまうていたからである。きつと、もう心から笑え

ないと思っていた。もう二度と…。

私は、ブラジルで様々な人の家にいた。それは、両親の兄弟達の家だった。

何日か、あるところに滞在してそしてまた、別の所に移動する。

そんな感じだった。滞在先では、色々と手伝っていた。

大体の母方の兄弟の人が、店を持っていたのでその手伝いをしていた。

そんな事をしながら、帰国の時が来た。

年が明けて、4月私は新学年になった。

新しいクラスには美術部の部員や、小学校からの友達もいた。今年も、私とワカバはクラスが違っていたが、昔と変わらず仲良くしていた。

私にとっては、今年は上手くやっていけそうなクラスとなっていた。そんな日々のある日、不幸な出来事が起こる。

ある朝、彼女は電車が急ブレーキを掛けたように、聞こえた。だけど、夢だと思って起きなかった。この選択がショックを軽減する代わりに、後悔を増やすことになってしまった。

鉄道は人身事故を起こしてしまった。原因は、中学生がイヤホンを付けて、自転車で線路にいたことだった。中学生は病院に連れて行かれましたが、死亡。

その中学生は、ハルキと同じ中学校であり、同じ小学校の卒業生だったのだ。彼女はとてもショックを受けてしまった。夢ならば消えて欲しいと思った。けど、夢であるはずがない。

その時、彼女は朝のことを思い出した。急ブレーキの音。聞いていたのに、起きなかったこと。

そのことを思い出して、すごく泣いていた。卒業のときに考えていたことは、まるで紙のように破り捨てられてしまった。別れても会えるという考えは。

しばらくは悲しみの底にいたが、無理でも笑顔でいたかったその訳は、家庭が危険となっていた。

父の仕事がないので、仕事を見つけようとするのだが、外国人という理由で駄目になってしまっていた。そのせいで、父のイライラが母に当たり、その後私に来てしまつて、私は心が不安定になってしまつていた。

そんなときに、ヒシが話を聞いてくれた。ヒシがいたから、今の私がいると思つている。ヒシが、あの時私の話を聞いてくれていなければ、もう存在していなかったと思う。

ヒシは、私の話を真剣になつて聞いてくれていたし、私を励まそうともし続けていた。そんな心遣いが私には嬉しかった。それから、少しずつ変わつていこうと思つたいた。自分を上手くコントロールできるように。

それから、年は変わり私は受験生になり、勉強も難しくなつた。そんな時、よく勉強を教えてくれたのが、ムっちゃんだつた。

彼女にはよく、相談にも乗つてもらつていた。だからきつと、ハルキは信じられたのだらう。彼女の優しさを。

私とワカバは、お互いに励ましていた。彼女は自分の道を切り開こうと頑張つていた。私も合格したい高校があつた。だから、励ましていた。

他の人は変わつても、彼女だけは変わらず接してくれていた。私はそんなワカバが大好きだつた。家族のような存在だつた。いや、家族より大きな存在で、暖かい光だつた。

ホミヤガとは、部活で会うぐらいになつた。去年はクラスも一緒だつたから、毎日会つていた。一時は隣だつたときもあつた。

彼にはよくいじめのようなことをしてしまつていた。はつきり言えば私がホミヤガの優しさに甘えていたのだ。

そんな優しいホミヤガが好きだつたこともあつた。でも駄目だつた。彼には好きな人がいたことを、当時の私は知らなかった。

部活ではいつものようにヒシと走り回つていた。正確に言えば追われていた。私はこんな毎日が好きだつた。みんなと過ごす毎日が、でもあと少しで、引退をしてしまふ。そうなるとなかなか会えな

くなる。

それでも楽しかったけど、やり過ぎだと思った。後になって考えてみれば、とんでもないことをしたと思った。

でも、それでもよかったと思える思い出の一部だった。これから、いい思い出であり続ける。

体育祭などが過ぎていき、受験も終わった。結果は、合格していた。私は、嬉しかった。それからの毎日は、目まぐるしく過ぎていった。そして、遂に卒業のときが来た。

明日は、とうとう卒業式当日だ。辛くても、楽しかった中学校生活も明日で終わってしまう。今になって色々な思い出が、頭の中を走り去っていった。様々なことを考えているうちに、式は淡々と進んでいた。

もうすぐハルキの番だった。とても複雑な気持ちでいた。

そして、ハルキの番となろうとしていた

「榎吾 玻璃希。」

「はい。」

ついに番が来てしまった。ハルキはたくさんのことを考えていた。そして、卒業式は終わった。泣いている人、笑顔の人、嬉しい人、悲しい人。それぞれだったけど、私は少し、悲しかった。原因は人身事故で亡くなった人の名前を呼んでもらえなかったということ。

クラスに戻ると、私は泣いていた。今思うとあの涙はきつと淋しいから流れたのだと思う。

小学校の卒業式は、また会えるし、近いからと思っていたが、中学の卒業式では、高校はみんなバラバラになって、下手したらもう会えないかもしれないと思ったら急に淋しくなった。そして、式中よりも思い出が出てきて、いつの間にか泣いていた。泣かないと決めたはずの式に。

しばらくして、一年生と二年生の時に担任をしてくれた先生が来た。とても嬉しかった。

私は、もっと長くこの中学校にいたいと思った。みんなが揃って

欲しいと思った。様々な想いを抱いて私は、中学校の正門を出た。

3年前の4月。私は期待と不安を抱いてこの正門を通った。それからたくさんの出来事があったけど、今、私はきつと言えるだろう。「この中学校に通って良かった。」

たえ、どんなに中学校が悪く言われても、私はこの中学校が好きだった。大好きだった。そして、これから先も大好きでいたい。

3年間はあるという間だったけど、とても良い3年間だったと思う。先生や、仲間たちに支えられて、ここまで来た。これからも進んで行きたい。

- 3年間ありがとうございました！ -

高校時代

4月。私は、高校生になった。私は新しい環境に、期待と不安を抱いて、正門を通った。

その日は、入学式をして、新しいクラスメイト達を知った。クラスには、同じ中学校出身の人が一人しかいなかった。

このクラスで、上手くやっていけるか正直不安だった。何故なら、また昔のようにいじめられるのではないか、そう思っていた。

入学してから、一週間が経った。

今は体験入部といって、部活を体験することが出来る期間だった。私は、はじめに空手道部を見に行った。だが、もう小学校5年生以来なので、体が付いていけずにいた。

次の日は、友人の誘いで硬式テニス部に行った。先輩も優しくだったので、この部活なら大丈夫と思ったのだろう。

硬式テニス部と入部用紙に書いて、担任に提出してしまった。何故あの時は、美術部を見に行かなかったのだろうと、今思うのだった。それはきつと、ホミヤガに会いたくなかったからであろう。

ホミヤガ
タラツキ 浦宮伽 ？ 槻。彼は、私と同じ中学の出身で、部活も同じだった。

でも、中学時代での美術部での記憶を消したかったので、彼を避けていた。はつきり言えば、彼を記憶の中から消したかったのだ。

私は昔、ホミヤガに惹かれていたのだ。だが、何度も思いを伝えずには断られていた。それだけなら、記憶を消したいとは思はない。

だが私は、ホミヤガに酷いことをした。だから、その事実を消し去りたかった。隠蔽したかったのだ。

私は硬式テニス部に入部してから、毎日のように練習に打ち込んでいた。部活は、いつも遅くに終わり、両親を心配させることもあった。でも私は、部活を頑張っていた。

もちろん、勉強面でも努力していた。部活から疲れて家に帰っても、机には最低でも1時間は向かって勉強をしていた。

そのおかげで、そこその点は取れていた。中学のときは一桁に近かった英語も、赤点にはならない程度の点を取れていた。

部活の帰り、私はある場所にいた。私は部活が早く終わるとたまに、ある人物に会うためにここに来るのだ。少し待って、その人物が来た。私が待っていた人は、今の私にとっては過去の、彼氏だった。

その人と少しの間、会話をして過ごした。あの頃の私は、彼の事が好きだった。

だが私は、自分でも気付かない間にホミヤガを探していた。もう、諦めたと思ったのに。

時は流れて、夏休みになった。私は、怠け癖がついたせいで、部活に行かなくなった。先輩が引退してから、先生が厳しくなり、辛くなったので、逃げてしまった。

そして休みが明けて、文化祭。私たちのクラスは、風船を配っていた。

そして、私はあるクラスの出し物に入った。そこは、お化け屋敷だった。

私は、お化け屋敷が大の苦手だった。だか友達の誘いだったので、断れなかったのだ。仕方なく友達と一緒に、入って行った。入ってみると、そこまで怖くなかったので良かった。

そして、様々な店を回り、たくさん楽しんだのだった。

文化祭が終わり、私は硬式テニス部から美術部へと転部した。やはり、私には運動部は向いていないのか。

そして、その日から美術部員として、活動を始めた。活動をする部屋は、先輩方とは離れていた。先輩方が活動している部屋は、あまりにも静かで恐いので、他の一年生部員のいる所に行った。

その部屋に行ってみると、私も含め4人しかいなかった。浦宮伽ホミヤガ タラツキ アメミウチ クジャ マサライ ニチロ ？ 槻 天未内 琥者 麻更伊 日芦。そして、私。

この4人しかいなかった。他の部員は、みんな幽霊部員となっていた。

初めのうちは、なかなか男子と話さないでいた。だけど、少しずつ話していった。ホミヤガとアメアメは中学から同じ部活なので、少しは話しやすかった。

そんな風にして、毎日部活で過ごしていた。くだらない会話をしたりもした。そんな毎日が、私にとっては楽しかった。

美術部に行き始めてから、私は彼氏と会っていた場所には行かなくなつた。理由は、別れたからだ。１ヶ月ほど、連絡が取れずにいたのだつた。

そして私は、自分の曖昧さに、未熟さに気づいたからだ。だから、別れを告げた。

そしてもう、当分は誰とも付き合わないだろうと、感じていた。

部活中。私はたまに、ホミヤガに悲しそうな顔をさせてしまう時がある。それは会話中に、彼女の名前を出したときだ。

磯河 イシカワ 利香 リカ。

彼女の名前を出すと、ホミヤガは悲しい顔をする。

そのときの私は、薄々気づいていたのだ。利香がホミヤガにとって、どんな存在であるかを。

磯河 利香。

彼女は、私の友人であり尊敬する人物であつた。彼女とは趣味が近かつたので、会話が弾んだりした。

でも私は、あまり人間関係が深いと、やはり他人を傷つけてしまうのだ。関係の無い他人も。利香も、傷つけてしまった。何度、私は同じことを繰り返せばいいのだろうか。綺麗事かもしれないが、もう人を傷つけたくはない。そう思うのだ。

そして、少しずつ私は人を避けるようになった。特に、男性を。時は流れて、１２月になった。私は、様々なことで忙しくしていた。テストに読書感想画。他にもいろいろあつた。そんな感じで、毎日を過ごしていた。

そして、私の誕生日。その日は、日曜日だった。だが、友人からの誕生日メールが届いていた。嬉しかった。

そして、テストも終わった。テストが終われば、少しは気が楽になるからだ。あとは、部活の課題。だが、それは冬休みにやればいいのだが。まあ、早めに終わらせるのも悪くない。

そんなある日。ホミヤガがあることを口にした。

それは、自主制作のドラマの話だった。

女子が参加していないので、出来ないのだった。私は参加してもいいと、ホミヤガに言った。そしたら、嬉しがっていた。とても、やりたかったのだろう。

台本の制作は、私がやると言った。そしたら、よろしく願いますと言ってきた。どんな話にするかは、メンバーと話し合わないといけないようだった。

ドラマの台本を書くのは、楽しみだった。初めてだったので、どんな感じで出来るかは分からなかったが。

「お邪魔します。」

今日は、ホミヤガの家で打ち合わせだった。何の打ち合わせかって。それは、ドラマについての打ち合わせだった。どのようにするかを決めないと、私の台本も始まらないから。

ドラマに参加する、人数は案外少なかった。

監督が一人。主役、ヒロイン。カメラ、台本。動画の編集。

打ち合わせに来た人数は、私も入れて四人だった。

私は、台本にヒロイン、それに編集者の役を買って出た。何故なら、パソコンを上手く使いこなせるのは私だけと言われたのだ。それに、私は小説を沢山書いているので、台本を書けると言われた。

ヒロインは、必然的に私だった。女子が私がいなかったからだ。

私は、こんなんで大丈夫なのかと思った。こんな、グダグダで。

私は家に帰り、早速台本作りに取り掛かった。

物語の方向は、恋愛と決まった。

恋愛系は、あまり得意ではなかったが、シンプルで言われたので了解した。

とりあえず、四人いるのだからみんな参加させてしまおう。

そう思つて、登場人物を考えていた。

出てきた役は、主人公である藤沼。フジヌマ

ヒロインの、柳瀬。ヤナセ

主人公の友人の、柏崎。カシワザキ

そして先生である、斎藤。サイトウ

この四人が出てきた。そして、台本の中では一番の問題が出てきた。

それは、情景が文章としてかけないこと。全て台詞だけだから。そのことには、いつも頭を悩ませていた。

あることを言われるまでは。

3学期の始業式が終わってから、数日後。監督からいきなり、私の考えていた恋愛系のドラマを却下されてしまった。詳しい理由は聞かされなかった。私はそのことを聞き、数日間は落ち込んでいた。とても、楽しく書いていた台本だったから余計に辛かった。

そして、私はドラマを降りた。もうやらないと決めたのだった。

ドラマには、私は絶対に私情は入れたくはなかった。なのに、あっさりと却下されたので頭に血が上ってしまった。

そして、監督と喧嘩をしてしまった。ドラマは、結局は打ち切りに。私は最後に、監督にこう吐き捨てた。

「どうせ私の気持ちなんて、監督には分からないでしょうね。二度とあなたには、文を書きませんから。」

私は二度と、そのこと以来会ってはいない。

私は、たまに監督とメールをしていた。ドラマの件は、もう済んだのだ。そしてあるとき、メールでこう言われた。

「ホミヤガは、中学のときの部活にいた部員がまだ諦められていないからね。」

そう言われた。

監督は私が、ホミヤガに好意を持っていると知っていたのだ。そして、私の考えていたことは確信になった。

ホミヤガは利香ことが、好きだと。

私は、ホミヤガにメールした。前の彼氏と復縁するかもしれないという今となつては嘘の報告と、彼の心境を聞くために。

私は最初、遠まわしに利害のことを聞いていたが、ホミヤガはとんでもなく天然で、結局は私が疲れて直球で聞いたのだった。

そしたら案の定、ホミヤガは利害のことが好きだった。私は、落ち込んだ。分かりきっていたはずの、結果だったのに。私はこう伝えたが、後の記憶があまり無い。

「気にしないで。私なんかじゃ、ダメだってことぐらい分かってた。でも、少しぐらい助けられたかな。助けられたなら、それでいい。私はいつも、助けてもらつてばかりだから。」

こう伝えたのだった。

このあとはもう、覚えていない。多分、泣いたのだろう。ホミヤガを想つて。

2月の入ったばかりのこと。私は部活の帰りに、ホミヤガと文具店に行つていた。私が文具店に用事と言つたら、「僕も行こうと思つてた。」と言われたので、一緒に来たのだ。私は、原稿用紙。ホミヤガは、漫画に使う材料を買つていた。

そして帰り際に私は、手紙を渡した。今までの私の思いを綴つた、手紙だった。ある言葉に思いをこめて。

午後9時を回ったとき、携帯が鳴つた。送信者は、ホミヤガだった。きつと、慌てたのだろうと私は思い、受信ボックスを開きメールを見た。するとそこには、私の思いもしないことが書いてあった。「ありがとう。これからも、影で支えていくよ。影は前を向いても、後ろを向いても同じ方向に伸びる。僕は影にしか立つことは出来ないけど、たとえ向かい合わせじゃなくても、後ろから背中を押すことは出来るかもしれない。僕が出来るのは、そのぐらいです。ごめん。あと、英語は分かんない。」

と書いてあった。私は、こう返信した。

「I wish you good luck. は「私は、あなたの幸運を願っています。」だよ。きつとそうなつてね。」

心からの願いだった。

「ありがとうございます。僕も思っています。」

ホミヤガからの返信だった。

このやり取りをしているとき、私はこう思っていた。ホミヤガも成長したな。精神的に。そう思った。

それは、過去に遡ることだった。

ホミヤガは、私を手紙やメールで「さよなら」と書くとき、心配してメールや電話をするのだ。きっと、私が消えると考えからだったのだろう。でも今回の、メールはそうだったものではなかった。むしろ、応援しているかのようなだった。

そう私は、感じた。昔は、あんなに天然だった奴が今は、少し人のことを分かったきたんだなと。そう思った。

手紙の件以降、私とホミヤガは周りから見れば、何も変わらなく過ごしていた。だが、私の中では少しずつだが、ホミヤガとの思い出をしまっていた。あの手紙には、私のけじめと覚悟も書いた。ホミヤガへの想いを、封印するという覚悟を。

そう決めたものの、やっぱり時間が必要だった。気持ちを落ち着かせないと、何も始まらないのだから。でも、それはとても難しいものだった。何故なら、毎日のように部活で顔を合わせるのだから。しばらくの間は、ホミヤガに対する気持ちと、それを否定する気持ちが自分の中で格闘していた。だが周りは、バレンティンの色に染まりつつあった。

そう、来週はもうバレンタインデーなのだ。女の子たちは、はしやいでいた。私は、そんな子達が羨ましかった。

自分で、彼氏はいらないと決めたのに、彼氏がいる人を見るとついそう思ってしまう。私の恋なんて、叶わないのだから余計に、羨ましいのだろう。

そう思いながら、変わらぬ日々を過ごしていた。その中でも、やはりいつの間にか、ホミヤガのいるクラスの方角を見ってしまう自分がある。

ホミヤガの心は、私には無いと知っていながらも、彼を探してしまふ。往生際が悪い。そう思っただった。

結局は、バレンタインを作ることにした。チョコレートを溶かして、型に流しいれた簡単な方法で作った。

渡す当日になり、私は先にクラスの友人に配っていた。放課後になり、私は部室に行った。まだ、誰も来ていなかった。そんな時、三人が来た。

「そうだ、アメアメ。」

「ん。」

「はい、バレンタイン。遅れてごめんね。」

「ありがとう。」

「マサさんにも、どうぞ。」

「どうも。」

「僕には。」

「誰が、ホミヤガにあげるかよ。」

「ガーン。」

「なんてね。あるよ、はい。」

「ありがとう。ハルキ」

そんな会話が、美術室の中に響いていた。

楽しい会話も終わりの時が来ていた。もう帰らなければならない時間が来ていた。

「そろそろ、帰ろうか。」

そして、私達四人は美術室をあとにした。

楽しい日々がこれからも続くと、一緒に笑っていると私は思っていた。

「今日から、二年生だ。楽しみだな。」

私は二年生に進級し、部活でも、先輩になる。まあ、後輩が入部してくれればの話だけど。

「確か、ホミヤガと同じクラスだったような。」

クラス分けは、一年生が終わるときに教えてもらったのだった。
「さてと、行こう。」

そして、私は人込みの中に消えて行った。

高校時代（後書き）

「高校時代」終了

エピソード

春。私は、二年生になった。部活でも、後輩が出来た。そして、副部長にもなった。

この事を書いている時の私はきつと、昔の傷はだいぶ癒えているのだろう。そして、沢山笑えているのだろう。

辛かった事もあった。だけど、周りの人たちが支えてくれた。だから、今でも、夢を追い駆けられる。

私の夢は、凄く困難だけど、頑張っていきたい。

そう決意した時、まるで応援するかのようになり、桜の花びらが舞ったのだった。そして私は、歩きだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2900v/>

～ Kokoro ～ ココロ

2011年8月22日03時38分発行